

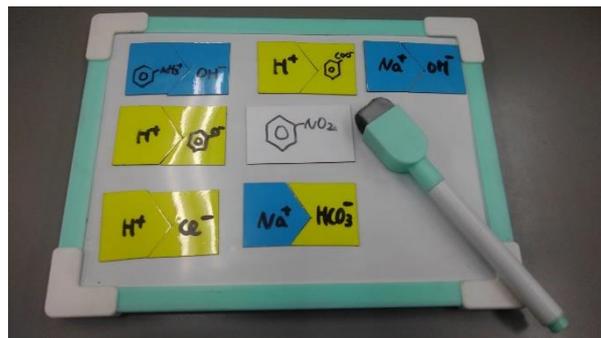
観点別学習状況の評価（A～C）の事例とその評価基準

1 評価のねらい

本校は、学力が高い生徒がほとんどであるが、積極的に自然科学に関わろうとする生徒は少ない。そのため、目に見えない現象は表面的な知識のみで理解したつもりになってしまう。有機化合物の分離の授業を通して、既習の知識を使って理解するだけでなく、どのように理解したかをまとめさせることによって自己の変容に気付かせ、粘り強く取り組んだり、学習を調整したりさせるねらいがある。

2 評価基準 【主体的に学習に取り組む態度】の評価

- 有機化合物の分離の基本の考えを踏まえ、指導者自作のマグネットとホワイトボードを用いたグループ活動を通して、芳香族化合物の分離を理解する。



達成度	A (十分満足できる)	B (おおむね満足できる)	C (努力を要する)
評価の項目			
試行錯誤しながら分液漏斗の中で何が起きているかを既習の知識から理解できたこと、またどのように理解したかを表現している。	知識の理解が得られ、かつどのように理解したかの過程も記述されている。	知識の理解が得られたことが分かるように記述されている。	知識の理解も、どのように理解したかの記述も見られない。

3 生徒の評価事例

【評価Bの例】

分液漏斗の中で何が起きているかを理解したことは読み取れる。しかし、どのように理解したかの過程の記述は見られない。このことから、「おおむね満足できる状況」(B)と判断できる。

同じ酸でもフェノールと安息香酸では酸の強さが異なるので、炭酸より強い酸でしか反応しない炭酸水素ナトリウムで分離することができるとことが分かった。

【評価Aの例】

具体的な物質名の記述はないが、中和反応などの記述から分液漏斗の中で何が起きているかを理解したことが読み取れる。また、「部屋で分かれていく」といった自分の言葉で表現していることから、どのように理解したかの過程が読み取れる。このことから、「十分満足できる状況」(A)と判断できる。

常にどちらに分離しているか意識しながら考えていくと試薬を入れる順番を間違えない気がした。どんどん部屋が分かれていくイメージで考えると分かりやすいと思った。一番最初にいれる試薬が決まっていなときは、まず中和反応を起こして水とエーテルにわけるとを最優先で考えるとうまくいくのかなと思った。

【評価Cの例】

一つ目は、分液漏斗の中で何が起きているかの記述がなく、どのように理解したかも「説明を聞いた」としか記述がない。

二つ目は、分液漏斗の中で何が起きているかを理解したと判断するには記述が少なく、どのように理解したかの記述が全くない。このことから、「努力を要する状況」(C)と判断できる。

最初は、2つ2つに分けてそこからどう分離させようか、など考えてもなかなかわからなかったが説明をきくうちに、分かるようになった。

酸塩基の強さの重要性

【「努力を要する」状況と評価した生徒に対する指導の手だて】

評価Aの例を見せる、評価Cの生徒に対して評価Aの生徒に説明させる、中和や弱酸(弱塩基)の遊離と、水やエーテルへの溶解をもう一度整理した上で、グループワーク前との認識の違いに気付かせることが考えられる。